デニス・カービンと兄の帽子

小さな古い街並みの真ん中をゆっくりとした曲線を描いて流れる河。そして、幾つかの立派な石橋が渡され、河によって左右に分かれた町をつないでいます。

河岸に沿って続く石畳の道沿いに、アパートやお店が並び立ち、よく手入れされた街路樹が、道行く人々に木漏れ日を落としています。

このお話の舞台となるお店は、そんな河岸の道に面してひっそりと佇んでいました。

お世辞にも、手入れが行き届いているとは言えない帽子たちが、ショーウィンドウに並び、ガラスには、

「カービン帽子店」

という文字が、しゃれた帽子のデザイン画と共に描かれていました。

帽子屋の店主、デニス・カービンは、少し禿げかかった男で、腹も突き出ているため、一見、ふけて見えましたが、よく見ると童顔で、まだ三十歳を過ぎたばかりの独り者でした。

「うるさい。説教はたくさんだ。俺には商売があるんだ。用が済んだら、さあ、さっさと帰った。帰った」

この帽子屋では、わりと頻繁に起こる騒がしいやりとりが、通りを行き交う人々の足を少しの間止めました。

通りに一瞬だけ姿を見せた帽子屋の店主が、木の扉をバタンと大きな音をたてて閉め、中に消えると、店の前には、追い出されて立ち尽くす老婆が残されました。

彼女は、悲しそうに首を横に振ると、ため息をつきながら、雪がちらつきだした町をとぼとぼと歩き出しました。

老婆は、町外れに住むデニスの母。そして、彼女が頻繁に店を訪れるのも、ほかならぬ息子デニスの身を案じてのこと。しかし、かんじんのデニスは、いつもこの調子で、母の忠告に耳を貸さず、彼女は今日も、むなしく店を後にす

るのでした。
母親が、心配しているのは、最近とみにひどくなった息子のやけを起こしたような、やる気のなさです。かつては、息子のデニスも帽子職人として、この小さな店に並ぶ帽子の数々は、すべて彼の手作りだったのですが、いまでは、たった一つの帽子以外は、よその工場から仕入れたものばかりです。
しかも、デニスは、それらを売る商いにも、すっかりやる気を失っていました。母親が、そんな息子の様子を案じるのは、当然の成り行きでした。
「まったく、おんなじことをぐだぐだと！耳にタコが出来ちまう。ほっといてくれって言ってるんだ！」
母を追い出したデニスは、カウンターを蹴とばしたり、伝票の束を床に叩きつけたり、ひとしきり店の物に当たり散らすと、机の引き出しからウィスキーの瓶を取り出しました。
そして、長椅子に横たわり、数回ラッパ飲みを繰り返し、窓の外にちらつく雪を横目に、なにやらぶつぶつと小言を呟いておりましたが、酔いが廻ったのか、いつのまにか深い眠りに入ってしまいました。
デニスは夢を見ました。子供が二人、草原を駆けていました。兄弟のようです。時折、前を行く兄が、弟がついてきているか振り返る様子や、その兄に追いつこうと懸命に走る弟の姿には、二人の仲の良さが感じられ、微笑ましいものがありました。
「兄さん・・・」
寝言で、そう呟くデニスの目から一筋の涙が頬を伝いました。その時です。店の外から、かん高い子供の声がして、デニスの眠りを覚ましました。
「お兄ちゃん。見て、見て。あの帽子。すごくかっこいいでしょ。ぼく、あの帽子が大好きなんだ。お兄ちゃんにも見せてあげようと思って」
目覚めたデニスは、頬を伝う涙に気づくと、両手でそれを拭いました。そして、ぴしゃりと顔を叩くと、長椅子から立ち上がり、声が聞こえた表の方を見ました。
雪は、さっきよりも、ずいぶんと強くなっています。寒さのせいで、すっかり曇ったショーウィンドウの外に、子供が二人、帽子を見つめている影がうっすらと見えています。

顔をぴったりとガラスに押しつけるようにしている小さい子を、大きい子が後ろから、かばうように立つ姿から、少し年は離れていますが、仲の良い兄弟だということは判ります。

デニスは、いままで見ていた夢と現実が重なったような不思議な心持ちがして、二人のその様子に心惹かれました。そして、ギーと、きしんだ音を立てて店のドアを開けました。

その音に驚いたのか、二人の子は、慌ててガラスから飛びのき、走り出しました。

「ちょっと待ちなさい。怒ってるんじゃないから、逃げなくっていいよ。ちょっと聞きたいことがあるんだ」

デニスは、ここ何年も出したことのない優しい響きを含んだ自分の声に内心驚きながら、走り去ろうとする二人に呼びかけました。

子供たちは、その声を聞くと、ぴたりと立ち止まり、おそるおそる引き返して来ました。

「君たち。ここで何をしてたんだい」

デニスの言葉に、二人は顔を見合わせていましたが、弟の方がショーウィンドウを指さして答えました。

「ぼく、あの帽子を見てたんだ」

すると、兄の方が弟の肩をしっかり抱き、デニスの目をまっすぐ見つめて言いました。

「おじさん。ぼくたち、なにも悪いことはしてないよ。ただ、弟は帽子がとっても好きなんだ。だから、ふたりで帽子を見ていただけだよ」

よく見ると、二人は震えていました。それが、叱られたと勘違いしたためか、この雪を降らす寒さのためか判りかねましたが、その様子をかわいそうに思ったデニスは、二人に優しく言いました。

「心配しなくていいよ。おじさんは、怒ってなんかいないから。それより、寒いだろう。まあ、中にお入り。そして、どの帽子が気に入ったのか教えておくれ」

おそるおそる後に従う二人を店の中に招き入れると、デニスは、暖炉に薪をたっぷりとくべ、そして、雪のせいですっかり暗くなった店に明かりを灯しま

した。
灯のもとで、改めて見る二人の子供は、ひどく貧しい身なりをしていました。服はつぎあてだらけで、いかに元気な子供でも、この寒さは辛かろうと思うほどでした。
暖炉にかけた鉄瓶の湯が沸くまでの間、デニスは子供たちに話しかけました。
「もうすぐ温かい飲みものをいれてあげるから、ちょっと待つんだよ。ところで、君たちが気に入ったのは、どの帽子かな」
すると、弟の方が目を輝かせ、ショーウィンドウに駆け寄り、その真ん中にある帽子を指さしました。それは「帽子あります」と書かれた店の看板の上に飾ったもので、しっかりと作られてはいるものの、誰の目にも、売り物ではないと判る古ぼけた帽子だったのです。
手入れがされていないため、すっかりほこりを被ってはいましたが、その帽子は、いかにもていねいに作られたようです。渋く落ち着いた緑色で、チロル風の短いつばの後ろが折り曲げられています。一見、山登り用かと思われましたが、よくみると、凝った独自のデザインが施され、普段被るにもおしゃれなように作られていました。
「やっぱり、これかい。この帽子が気にいったのかい」
デニスは、さも、満足そうに微笑むと、その子の頭を撫で、目を細めてたずねました。
「どうして、これがいいのかね。他にもいっぱいあるのに。これなんかどうだい。いかにも子供らしい、かわいい帽子だろう」
デニスが、手にした帽子は、最近の流行のもので、つばの巾が広く、ピンと立った羽飾りがしゃれたものでした。
しかし、その子は大きく首を横に振りました。
「だめ。これがいいんだ。ぼくは、この帽子が一番好きなんだよ」
といって、あくまで、古ぼけた帽子にこだわりました。デニスは、その子の返事にいちいち小さく頷き、
「さあ、お湯が沸いたようだ。まあ、ここに座りなさい」
そう優しく言って、その子を長椅子に座らせると、デニスは、ココアにミルクをたっぷりと注ぎ、大きな菓子皿にココナッツクッキーを山盛にして、二人

にふるまいました。
「いただきます！」
二人は、揃って両手を合わせ、きちんとお辞儀をしてから、おいしそうに食べはじめました。
――――身なりは貧しいが、きちんとしつけられたいい子たちだな。
デニスは、二人の様子に感心しました。
「そうだ。二人の名前を聞いてなかったな。おじさんは、デニス。デニス・カービンって言うんだけど。デニスおじさんでいいよ」
「ぼくの名は、ニックといいます。弟はティムです」
兄のニックが、ココアを飲む手を止めて、背すじを伸ばし、しっかりと答えました。弟のティムは、クッキーを頬張りながら頷いています。
本降りになった雪が落ち着くのを待つ間、デニスは二人から、いろいろなことを聞きました。
兄のニックは、小学校の高学年で、弟のティムは、来年小学校に入る年だということ。家族は、他に父と母。以前は、この町の人なら誰でも知っている高級住宅街に住み、なに不自由のない生活をしていましたが、去年、父親が経営していた町工場が突然倒産し、今は町外れの小さなアパート暮らしをしながら、父親は工場の再建に向けて、懸命に働いているということなどです。
ふと気づくと、窓から明るい陽射しが差し込んでいます。いつのまにか、雪もすっかり止んだようです。
「デニスおじさん、ありがとう。ごちそうさまでした。とってもおいしかったです」
雪が止んだことを知り、ニックは、立ち上がり、ていねいにおじぎをしました。
「お願いがあるんですけど。ティムは、またあの帽子を見に来たがると思うので、また二人で見に来てもいいですか」
そして、弟を立たせ、お辞儀をさせると、ティムは、素直にぺこりとかわいい頭を下げました。
「もちろん、いいとも。いつでも見においで。そんなに気に入ってもらえてうれしいよ。本当はティムに被ってもらいたいぐらいだが、あいにく、この帽子

は大人用だからね」
デニスは、そう言って、ティムの頭を撫でながら、店の外まで二人を見送りました。
「雪で道がすべるから、気をつけてお帰り」
積もった雪に、日の光が当たって、あちらこちらに虹色の粒がキラキラと輝く中、二人は仲良く、石橋を駆けて渡って行きます。
デニスは、晴れやかな気持ちで、その子たちを見送りました。
その晩、デニスは、あの古ぼけた帽子の埃や汚れをていねいに拭いながら、いつまでも暖炉の傍らに座っていました。その目は、なにか遠い昔を懐かしんでいるようでした。

幾日かが過ぎました。日々、冬が深まっていく季節ですが、その日は、とくに寒さがこたえました。雪は、朝から降り続き、通りを行き交う人も途絶え、帽子屋のデニスは、てもちぶさたな時を過ごしていました。
日が暮れて、店を閉じると、寒さが身に沁み、デニスはそうそうに店の二階にあるベッドに潜り込みました。
どれほど眠ったんでしょう。デニスは、ふと、なにか物音がしたような気がして、目を覚ましました。窓をのぞくと、まだ雪がしんしんと降っています。
眠い目をこすりながら、ランプを片手に階段を降りると、誰かが店の扉を叩いているようです。
「こんな雪の夜に誰だろう？」
不審に思ったデニスが、慎重にそっと扉を開けると、ニックが立っていました。
「ニックじゃないか。どうしたんだい。こんな夜更けに」
見ると、ニックは寒さに肩を震わせ、唇は紫色になっているようです。
「さあ、とにかく中に入りなさい」
デニスは、慌ててニックの肩を抱くと、店に引き入れました。そして、急いで暖炉に火を付け、ニックを傍らに座らせると、温かいココアを注ぎました。
「寒さで、声が出ないようだな。とにかく、これでも飲みなさい」

ニックは、黙ってそれを受け取ると、両手を温めながら、ゆっくりと飲みだしました。ココアの温かさで、唇に赤みがかえってくると、ニックはせきをきったように一気に話しだしました。

「弟が。ティムが死にそうなんです。ティムは、もともと体が弱いんです。急に寒くなったものだから。はじめは、風邪だと思ってたんだけど。咳がだんだんひどくなって。熱が下がらなくって。お医者さんは、今日か明日が峠だろうって。峠って、お母さんに聞いたら、死ぬかもしれないって」

「肺炎かな。かわいそうに・・・」

デニスは、両手で顔を覆い、ため息をつきました。

ニックは、顔色がありません。

「ティムは、生まれた時から弱かったんです。すごくいい子なんだけど。お医者さんが言うには、生きようとする力が弱いんだって。生きたいって思わないと、病気に負けてしまうんだって。それを聞いて、ぼく、すぐに病院を飛び出して来たんです。ティムの一番のお気に入りの、あの帽子があれば。あの帽子を被らせて元気づければ、生きたいって思うんじゃないかと思って・・・」

そこまで言うと、ニックは目に涙をいっぱい溜め、鼻をすすりあげました。

デニスは、思わず、膝をついて、ニックを抱き寄せ、なぐさめました。

「もういい。もうわかった、わかった。だいじょうぶ。ティムは、きっと助かるから」

弟を思う気持ちが、抱きしめたニックの全身から伝わり、デニスの中から、熱い思いが込み上げてきました。

「あの帽子は大人用だ。よし。おじさんが、あの帽子とまったく同じデザインで、ティムのための帽子を作ってやる。明日の朝までに作って、きっと病院に持って行く。そうすれば、ティムは喜んで元気を出すはずだ」

ニックは、顔を上げ、デニスを見つめました。

「でも、一晩で帽子を作れますか？」

「だいじょうぶ。絶対、作って持って行くから。それまで頑張るよう、ティムに言うんだよ」

そして、デニスは、子供でも着れそうな古い自分のコートを倉庫から引っ張りだし、ニックに着せ、裾をピンで止めてやりました。

「おじさん。夜遅くにごめんなさい。じゃあ、ぼく、病院に帰ってティムについててあげないといけないから」
デニスは、扉を開けて、優しくニックを送り出しました。
「きっと、朝には帽子を届けるから、ティムのそばから離れるんじゃないよ」
ニックは、深くうなずくと、雪の夜道を走り去りました。

店の奥の作業場のランプを灯し、すっかり被った埃を払い、手短に準備を整えると、デニスは、真剣な面持ちで、作業台の前に座りました。台には、あの帽子が置かれています。
そして、デニスは、その帽子を前にして、この何年もの間、合わせたことのない両手を合わせ、一心に祈りました。
「兄さん。あの子たち、ティムとニックのために、兄さんに貰ったこの帽子をぼくが作る。どうか、兄さん。ぼくに力を貸して・・・」
兄のニックの弟を思いやる強い思いに触れ、デニスの長年閉ざされていた心が開きはじめていました。帽子の型を作る作業に取りかかりながら、デニスは、遠い昔を思い出していました。

とっても優しい兄でした。いつも、気が弱く、ぐずなデニスをかばってくれました。五歳年上だった兄は、しっかりしている上に器用で、なんでもできる頼りになる兄でした。
デニスが十歳の時でした。兄弟は、突然、父を亡くしたのです。泣きじゃくる弟の肩をしっかり抱きながらも、兄は涙ひとつこぼしませんでした。
「父さん。母さんと、デニスは、ぼくがきっと守るから、安らかに眠ってください」
と、父の永眠した顔をまっすぐに見つめ呟く凛々しい兄の姿が思い出されます。
その後、兄は、学校を中退し、父の後を継いで帽子職人となりました。小さい頃から、父の手ほどきを受けていた兄は、めきめきと腕を上げ、すぐに町中

の人に認められる職人となりました。そして、帽子屋を営み、母とデニスを養ってくれたのです。

一方、デニスは、そんな兄が大好きで、甘えてばかりいました。兄が、帽子作りに励む中、一緒にいたいばっかりに、作業場でうろちょろと邪魔ばかりしていたように思えます。しかし、兄はそんなデニスを一度だって叱ったこともなく、いつも優しい眼差しで弟を見ていました。

いつか役に立つこともあるかもしれないと、帽子作りも教えてくれました。しかし、もともと不器用だった上に、甘えたのデニスは、いつも中途半端で、かんじんの所は兄に助けてもらってばかりでした。

そんなデニスでしたが、兄の強いすすめで、高等学校も最後まで出させてもらったのです。

この帽子。いま、目の前にあるこの帽子は、優しい兄が、弟の卒業を祝って、丹精込めて作ってくれたデニスへのプレゼントだったのです。

走馬燈のように、デニスの脳裏に、思い出がよぎります。しかし、その兄が、突然、この世を去ったのは、デニスが卒業したすぐ後でした。列車事故に巻き込まれたのです。

デニスの悲しみは、大変なものでした。しばらくは、なにも手につかないほどでした。デニスは、いつも兄と一緒だった帽子屋の作業場で、作業椅子に座り続けて日を過ごしました。

そして、いつのまにか帽子作りを始めたのです。帽子を作っていると、兄がそばにいてくれているような感じがして、デニスは、寂しさを紛らわすことができたのです。こうして、デニスは、帽子屋となりました。

しかし、兄がいつもそばにいるという、その感じが、年とともに薄れていくことにデニスは苛立ちを覚え出しました。

そして、この数年は、すっかり自分から兄が遠ざかってしまったような感じがして、デニスは、帽子作りもなにもかも、すっかりやる気を失ってしまったのでした。

記憶がここまで辿られた時、帽子を作るデニスの手が止まりました。

「ああ、これじゃ、だめだ。うまくいかないな。この手が・・・」
額に汗をして、懸命に帽子作りに取り組むデニスでしたが、もともと器用ではないうえに、長い間、細かい作業から遠ざかっていたせいで、手がどうしても思うように動きません。
「兄さん。お願いだ。ぼくに力を・・・」
見れば見るほど、兄の帽子は心のこもった完璧な仕上がりです。これとそっくりにしなければ、と思う焦りがデニスを追い詰めます。
疲れは、限界に達していました。その思いとは、うらはらにデニスの意識は次第に薄れていきました。

雲ひとつない青い空の下。菜の花でしょうか。大地を黄色く染めた一面の花畑が、そよそよと心地よく吹き抜ける風に波打つ、美しい景色がどこまでも続いています。
その中を子供が二人、駆けて行きます。見ると、兄のニックと弟のティムです。前を行くのはニック。後ろのティムは、うれしそうに兄に遅れまいと走っています。
そして、いつのまにか、デニスは、そのティムになりきって、懸命に兄の姿を追いかけました。
突然、先を行くニックが振り返ると、その顔が、死んだ兄の顔に変わりました。そして、はっきりとした口調でこういったのです。
「デニス。ぼくが、おまえについててやる。いままでもずっとそうだった。だから勇気を出して、精一杯頑張るんだ」
その声が、耳元ではっきり聞こえたように感じ、デニスは、ハッとして目覚めました。作業台にうつ伏していたのです。
頭を振って、目を覚まそうとするデニスの耳元で、兄の言葉が、いっそうはっきりと、繰り返されました。
「デニス、デニス。ぼくが、ついてる。頑張るんだ・・・」
デニスの胸が熱くなりました。そして、心の底から、勇気のようなものが沸いてきました。
「兄さん・・・。ありがとう」

デニスの目から涙が溢れました。
「よし、やるぞ。あの子たちのために！」
涙を拭ったデニスは、再び帽子作りに取りかかりました。
すると、なんとしたことでしょう。その手が器用に動き始め、しっかりと帽子のフェルトの生地を縫い付けだしたのです。それはまるで、器用だった兄の手の動きそのものだったのです。
この夜、カービン帽子店の明かりは、朝まで消えることは、ありませんでした。

「兄さん、起きて！帽子だよ。兄さんのいったとおりだ。あの帽子だよ！」
ニックは、病室で、ティムに付き添ったまま、いつのまにかベッドにうつ伏して、眠り込んでいましたが、弟の声で目を覚ましました。
ベッドの上には、真新しい帽子がありました。それは、約束どおり、あの帽子とそっくりに作られた子供用のものでした。
「帽子を取って！帽子を取って！」
起き上がろうと、懸命に両手を伸ばす弟にうながされ、帽子を手渡すと、ティムはさっそくその帽子を被りました。
「わあ。ぼくの頭にぴったりだ！」
昨夜まで、血の気を失っていたティムの頬にみるみる赤みがさしてきました。
「すごいや。あの帽子が、ぼくのものになったよ。よーし、この帽子を被って兄さんと、山へ登るんだ」
ティムのはしゃぐ声に、椅子にもたれて眠っていた母親も起き出してきました。
「ああ、なんてこと。これが、ティムが言ってた帽子かい。ほんとうに、よかったわね。でも、山に行くなら、すっかり元気にならないとね」
ティムは、身を起こして言いました。
「うん。ぼく、きっと元気になるよ。病気なんかに負けない。この帽子を被って山に行くんだから」
病室のドアの隙間から、中の様子を伺っていたデニスは、ティムの元気な声

を聞いて、満足そうに頷きました。そして、十字を切って、神様にティムの無事を祈ると、気づかれないようにそっと廊下を抜け、階段を降りました。

外に出ると、先程まで降っていた雪はようやく止んだようです。朝日が、まだ人気のない町を照らし、すっかり積もった雪を真っ白に輝かせています。

デニスの心もこの景色と同様、晴れわたっています。

「兄さん。ありがとう。おかげで、ティムは助かりそうだよ」

「母さんに、謝らないとな。そして、ぼくは、もう大丈夫だって、安心させてあげないと。そして、明日から母さんと一緒に住もう」

デニスは、ここ数年、母に心配ばかりかけてきたことを心から悔やみました。いまは、母を抱きしめて、謝りたいという思いでいっぱいでした。

真新しい雪をキュッキュッと踏みしめながら、デニスは、母の家に向かう足を早めました。

「おや、ティムかい。学校はどうだった。今日は、始業式だったんだろう」

帽子屋の扉を開けて、勢いよく子供が駆け込んでくると、デニスの母親が、店の掃除の手を止めて話しかけました。

「うん。今日から一年生なんだ」

得意気に、手を腰に当てて立つティムの頭に、あの帽子が光っています。

「デニスや。ティムが学校から帰ったよ」

作業場で帽子作りに励むデニスに、母が声を掛けます。

「デニス。おまえ、この頃、ほんとうに兄さんに似てきたね。そうやって、そこに座って作業してると、あの子を見ているようだよ」

作業台の上の兄の帽子にチラッと目をやると、手を休めることなく、デニスは答えました。

「そうかい。母さん。ティム、学校はどうだった？ちょっと待っててくれ。おじさん、この帽子だけ、すぐ仕上げるから」

あの日以来、すっかり器用になった手で、デニスは、てきぱきと仕事をこな

していています。ショーウィンドウの帽子もすっかりデニスの手作りのものに入れ替わり、母親が毎日手伝ってくれているおかげで、店は見違えるほど、さっぱりときれいに片づいています。

「おじさん。おばあさん。ただいま」

また、扉が開いて子供が入ってきました。こんどはニックです。

「ニックもお帰り。ちょうどよかった。いま、お茶を入れているところだから、ふたりともちょっと待っててね」

母は、いそいそとお茶のしたくをし、デニスも作業を終えて出てきました。

「ティム、どうだった。もう、友達はできたかい？ニックも、今日から新しいクラスだったね。どんな感じだった。お茶を飲みながら、ゆっくり、聞かせておくれ」

テーブルには、お茶とデニスの母の手作りクッキー。デニスと母は、学校帰りのティムとニックの話しを聞くのが毎日の楽しみです。暖かい春の陽射しが、心地よい木漏れ日をショーウィンドウに落としています。

カービン帽子店からは、今日も明るい笑い声が響き、通りを行く人々も、その声ににっこりと微笑むのでした。